

## マルコによる福音書 14 章 27 節～42 節

2018 年 10 月 4 日

古本 靖久

1、聖歌 368 番 「いときよき神を ほめたたえよ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 92 ページ）

4、テキストの位置

先月（といっても 8 月ですが）の聖書に聞く会では、いわゆる「最後の晩餐」について学びました。木曜の夕方におこなわれたとされるこの聖餐式を記念して、聖木曜日の礼拝をおこなう習慣もあります。

今月の箇所は、その夜に起こった出来事です。ただし日没を過ぎていきますので、ユダヤの暦では金曜日になっています。イエス様が逮捕され、弟子たちから離れるその前に、何があったのでしょうか。

エルサレムにて	水曜日	14:1-2	イエス殺害計画
		14:3-9	埋葬準備
		14:10-11	ユダの思い
	木曜日	14:12-16	過越の準備
		14:17-21	主の晩餐
		14:22-26	最初の聖餐式
		14:27-31	ペトロの裏切り予告
		14:32-42	ゲツセマネでの祈り
		14:43-52	イエスの逮捕
		14:53-65	イエスの裁判
14:66-72	ペトロの否認		

5、節ごとに

◆ ペトロの裏切り予告

**14:27** （そして）イエスは弟子たち（彼ら）に言われた（う）。「あなたがたは皆わたしにつまずく。（それは）『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまふ（らされる）』と書いてあるからだ。

イエス様は弟子たちが、「つまずく」と言われます。「つまずく」とは、信仰から脱落するという意味です。原文には「わたしに」という言葉がないため、「福音」や「イエス様の十字架の出来事」に「つまずく」ともとることができます。

後半の部分は、ゼカリヤ書 13 章 7 節の引用です。神さまが「打つ人」でイエス様が「羊飼」、弟子たちは散らされる「羊」です。弟子たちはイエス様の死によって逃げて行くこととなりますが、それは聖書に書かれているとおりののだとイエス様は告げます。

14:28 しかし、わたしは復活した（よみがえった）後、あなたがたより先に（に先立ち）ガリラヤへ行く。」

「先立ち」には時間的に先に行くという意味と、前に立って導くという意味があります。この言葉はイエス様がエルサレムに行く場面でも使われた言葉です（10 章 32 節）。羊飼いであるイエス様の姿が目に浮かびます。

弟子たちが散らされて、すべてが終わるわけではありません。イエス様と弟子たちは、羊飼いと羊という元の関係に戻されるのです。

14:29 するとペトロが（彼に）、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。

ペトロのこの反応は、イエス様が最初の受難予告をした際、イエス様の言葉を否定した場面を思い起こします。ペトロはまたしても、イエス様の預言を否定するのです。

14:30 （そして）イエスは（彼に）言われた（う）。「はっきり言っておくが（アーメン、わたしはあなたに言う）、あなたは（自身が）、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言う（拒む）だろう。」

「あなたは、今日」の「あなた」はかなり強調されています。また「わたしのことを拒む」と訳した語もかなり強い言葉で、裁判などではっきりと否定証言をするときなどに使います。イエス様を拒むということは、イエス様だけではなく神さまとの関係も失うことです。

ちなみに「鶏が二度」と書かれているのはマルコだけで、他の福音書には回数は書かれていません。最初の鳴き声で、ペトロよ、思い出しておくれという意味なのでしょうか。

14:31 （しかし）ペトロ（彼）は力を込めて言い張った。「たとえ、（わたしがあなたと）御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らない（拒む）などとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

福音書が書かれた時点で、ペトロはすでに殉教していたと思われます。しかしここではそういうことを言っているのではありません。人が自分の信仰の強さを誇る限り、何度も間違いは繰り返されるのです。

## <前半の箇所から>

ペトロはイエス様の最初の受難予告の際、イエス様の死がすべての終わりであると考えていました。そして今回、イエス様につまずくことが、イエス様との関係の終わりであると思っていました。しかしそれは真実ではありません。イエス様の復活によって、その関係は続けられていくのです。

そのことを弟子たちが知ったのは、復活のイエス様に出会ってからでした。わたしたちはどうでしょうか。

### ◆ ゲツセマネでの祈り

14:32 (そして) 一同(彼ら)がゲツセマネという所に来ると、イエス(彼)は(彼の)弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。

「ゲツセマネ」とはヘブライ語で、「油をしぼる場所」という意味です。オリーブの木が植えられた農場であったと思われます。その場所で、イエス様は祈ります。

14:33 そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われた(一緒に連れて行く。)が、(そして)イエス(彼)はひどく恐れてもだえ(悩み)始め、

この三人の弟子は、ヤイロの娘が生き返った場面にも、イエス様が変容した場面にもついて行きました。彼らはそこで、神さまの大いなる御業にふれました。しかし今回彼らが見たものは、イエス様の人間的な恐れでした。

死を恐れるイエス様の姿は、神の子の姿とは遠く離れているかもしれませんが。しかしイエス様は人間として、死の恐怖に対していくのです。人間の痛みや苦悩を、同じように経験されるのです。

14:34 (そして)彼らに言われた(う)。「わたし(の魂)は死ぬばかりに悲しい。ここを離れず(に留まって)、目を覚ましていなさい。」

イエス様は「わたしの魂は死ぬばかりに悲しい」という言葉を、弟子たちに発します。イエス様はご自分の弱さを、弟子たちにさらけ出しています。わたしたちも悲しみや苦しみの場面で、強くある必要はないのです。

「目を覚ましていなさい」という命令は、13章32~37節にもありました。その箇所では、「目を覚ます」が肉体的な意味ではないことを説明しました。ここでは三人の弟子たちには「肉体的に」目を覚ますことが求められています。イエス様は弟子たちに、自分の苦しみに少しだけでも近づいてほしいと思っておられたのかもしれません。

14:35 (そして) 少し (先に) 進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、

「できることなら」と書かれているので、イエス様が神さまの力を疑っているように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。「神さまの意志にかなうならばどうぞ」、とイエス様は苦しみの中で祈ります。

14:36 (そして) こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけて (除いて) ください。しかし、わたしが願うこと (の思い) ではなく、御心に適うことが行われますように (を)。」

「アッバ」は前の聖書では「アバ」と書かれていました。「アッバ」は幼児語で父を指す言葉です。たとえば「おとうちゃん」という感じでしょうか。当時のユダヤ人は、神さまのことを「アッバ」とは呼んでいません。このような呼び方をするのは、イエス様だけだったようです。

というのもユダヤ人にとって、神さまは畏れ多い方だったからです。自分たちとはまったく違う場所におられ、名前を呼ぶことすらできない存在でした。しかしイエス様は、「おとうちゃん」と神さまに願います。

杯とは苦難の象徴です。これを自分の前から取り去ることができるのは、神さまだけです。しかしイエス様はここでも「神さまのみ心」を求めます。わたしたちにはこのような祈りが出来るでしょうか。

14:37 (そして来て) それから、戻って御覧になると、弟子たち (彼ら) は眠っていたので (るのを見る)、(そして) ペトロに言われた (う)。「シモン、眠っているのか。(あなたは) わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。

このイエス様の思いを、三人の弟子たちは共有することができませんでした。目を覚まして待っていることができなかったのです。それほど長い時間、イエス様は祈っておられたのでしょう。ある本には「三人の弟子たちは眠り、他の弟子たちは遠くにおいていかれた。ではイエス様の祈りを、誰が書き留めたのだろう」と書かれていました。それはどうでもいいことですが。

先ほど「イエス様が死ぬなら自分も死ぬ」と偉そうなことを言っていたペトロも、眠ってしまいました。起きて神さまと交わろうとしていたイエス様の横で眠る行為は、イエス様に対する裏切りとも取れるかもしれません。イエス様が彼を、ペトロ (岩) ではなく本名のシモンと呼んだのは、彼の挫折を強調するためなのでしょう。

14:38 (あなたたちは) 誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心(霊)は燃えても、肉体は弱い。」

イエス様は再び、「目を覚まして祈る」ように命じられます。セカンドチャンスです。二度の過ちですべてが終わることはありません。

当時の考え方では、人間は霊と肉とからなっていると考えられていました。パウロの手紙にも、その考え方が反映しています。霊に対し、肉は弱さや汚れ、罪の象徴など、あまり良くない意味で用いられます。誘惑に陥るのも、肉が弱いからだとされるのです。

14:39 更に(そして)、(再び) 向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。

イエス様はまた、祈りに行かれます。同じ言葉で延々と祈られます。祈りの言葉は聞こえなかったのでしょうか。弟子たちには子守唄のように聞こえたのでしょうか。つまらない講義を聞いているような心境だったのでしょうか。

14:40 (そして) 再び戻って御覧になると、弟子たち(彼ら)は眠っていた。ひどく眠かった(彼らの目は重くなっていた)のである。彼らは、イエス(彼)にどう言えばよいのか、分からなかった。

彼らの目は重くなっていました。自分の意思と反して、まぶたが閉じていく。そのような経験はわたしたちにもあるでしょう。「しかし、よりによって、こんなときに！」と思ってしまうが。

イエス様はきっと、孤独を感じられたのだと思います。「羊飼いが打たれたときに、羊は散ってしまう」と言ったものの、ずっと一緒に過ごしていた弟子たちです。起きて、自分の苦しみをわかって欲しいと思ったことでしょう。しかし弟子たちは、イエス様の思いを受け止めることができませんでした。イエス様の最も中心的な弟子たちですら、イエス様の苦難を理解することができなかったのです。

14:41 (そして) イエス(彼)は(彼らに) 三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている(のか)。休んでいる(のか)。もうこれでいい(終わった)。時が来た。(さあ) 人の子は罪人たちの手に引き渡される。

三度目の祈りに行った場面は、書かれていません。きっと同じ祈りをされたのでしょう。同じ出来事が三度繰り返されることで、この出来事の意味は強められます。来月以降に出てくる「ペトロの否認」もそうです。祈りのときは終わりました。イエス様はご自分の死が神さまのみ心であると確信し、それを受け入れようと決意します。

14:42 立て（起きなさい）、行こう。見よ、わたしを裏切る（引き渡す）者が（近づいて）来た。」

「起きなさい」という言葉は、復活のときにも使われる語です。「起きなさい、行こう」とは、「彼に会うために前進しよう」というニュアンスです。つまりイエス様は、自らご自分を引き渡す者に近づいていくのです。

受難のときは来ました。エルサレムに向かった時と同じように、イエス様はその場に向かって自分から歩いて行かれます。

### <今日の箇所から>

イエス様はゲツセマネで、祈られました。その祈りは「おとうちゃん、助けて」というものでした。「苦しいから、悲しいから、一緒に祈って」、そう弟子たちに語り掛けるイエス様の姿は、わたしたちにはどう映るでしょうか。

「神の子どもなのだから、もっと強くいてほしい」、そう思うでしょうか。わたしはキラキラ光って「強い」イエス様も好きですが、このように「弱い」イエス様もとっても好きです。それは自分が苦しいときに、「わかるよ」と言ってくれそうだからです。自分が涙を流したとき、一緒に泣いてくれると信じているからです。

しかし弟子たちは、目を覚ましていることができませんでした。三度もチャンスがありながら、いつまでも眠り続けていました。

この姿は、わたしたちに励ましを与えてくださいます。イエス様の弟子がみんな、素晴らしい人だったらたまりません。イエス様の命じることをすべてそつなくこなし、きちんと祈り、イエス様から離れたことのない人だけが弟子になれるのだとしたら、わたしには無理だと思います。

聖書は、イエス様の一番近くにいた弟子ですら、何度もつまずいたと報告します。完璧な人間など、いないのです。何度も離れ、何度も裏切り、何度も失敗しても、必ず来てくださる。それがイエス様であり、神さまの愛なのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は 10 月 25 日(木)10 時半からです。「イエスの逮捕」(マルコ 14 : 43~52) について学んでいきます。